

新渡戸稲造を支えた祈り

——祖父、新渡戸稲造の思い出を振り返って——

加藤 武子

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：加藤さんと初めてお目にかかりましたのは1996年のことでした。95年にギリシアの現役政治家、ヴィロン・ボリドラス氏が、新渡戸稲造先生の『武士道』をギリシア語に翻訳して出版された^(※1)ことを新聞で知り、そのことで彼にお手紙を差し上げたところ、驚いたことにすぐにギリシアのアテネからお電話がかかってきました。なんでも、ギリシアにある日系企業200社近くにご本をプレゼントされたそうですが、手紙をもらったのは私からが初めてだと、大変喜んでいらっしゃいました。そうしましたら、その次の彼からの手紙の中で、新渡戸先生のお孫さんで加藤武子さんという方がまだご健在なので、ぜひお目にかかってはどうかご紹介を受けました。

先生のことは小さい頃から尊敬しておりましたので、今日は新渡戸先生の思い出についてお伺いできることを楽しみにしておりました。加藤：ありがとうございます。祖父についての初めての思い出といえばこんなことがありました。祖父は、1919年にお弟子さん5人をつれて欧米視察に出発しました。最後にロンドンに到着したのですが、急速国際連盟に事務次長として就職が決まり、帰国できなくなってしまったのです。国際連盟はジュネーブに本部があったと知られていますが、当時はロンドンに仮事務所がありました。私は翌年1920年に生まれたのですが、祖父とはしばらく会えずじまいでした。関東大震災が起り、その知らせを受けて8ヵ月後に帰国した祖父に初めて抱き上げられ頬ずりされて、ひげ跡が痛いなあと感じたことが今でもまざまざと思い出されます。4歳のときのことでした。

佐多：2年前の秋には、ご主人の英倫様共々盛岡までご一緒させていただきました。その折、フィンランド駐日大使もご出席の夕食会が開かれましたが、非常に貴重な事実を私は知ることができました。

フィンランドとスウェーデンには生まれたバルト海にあるオーランド島は、もともとフィンランドと共にスウェーデン領だったのですが、スウェーデンがロシアに敗れてロシア領となりました。その後ロシア革命によりフィンランドが独立したことをきっかけに、フィンランドとスウェーデンの間でオーランド島の領有権をめぐる紛争が起り、国際連盟に調停を頼んだわけです。その調停役の責任者だった新渡戸先生が、領有権をフィンランドに与え、公用語はスウェーデンとして高度な自治政府を認められました。今でも領土紛争解決のモデルケースとして、実に見事な新渡戸裁定との称賛を



加藤 武子 / かとう・たけこ

1920年生まれ。東京都出身。新渡戸稲造氏の孫にあたる。

新渡戸稲造氏ゆかりの著書や写真、書類を多数所蔵する傍ら、新渡戸稲造氏の研究を続ける。新渡戸稲造氏の英文『日本文明における外来の二潮流』『国際連盟の業績と現状』『幼き日の思い出』『エルキントン家宛書簡』などの翻訳を手がける。新渡戸稲造全集19巻と22巻に収録。

得ていることを知りました。我が国の北方領土問題にもこの方法は適用できるのではと、そのときからよく頭に浮かびます。このような国際的な活躍をされた他にも、新渡戸先生は実に様々なお顔をお持ちでいらっしゃいますね。

加藤：そうですね。祖父が亡くなった後、ジュネーブで祖父が書いた『幼き日の思い出』という本を出版することになったのですが、その端書きに祖母メリーが、「新渡戸稲造という人は、色々な苦しみや困難に遭うたびに目をみはるような成長をする。それで私は日々驚きを隠せなかった」と書いているのです。私が子供心に感じた祖父の印象もそれに通ずるものがあります。満州問題を調べるためにリットン卿が日本に乗り込んでこられたときも、周囲の者がなんとなく不安そうの中で、祖父だけが毅然としていました。

佐多：非常に信念を持っておられる方だったのですね。また信仰心も厚い方であられました。

加藤：熱心なクェーカー教徒^(※2)でした。私はいつも「なにがあっても、おじいちゃんは大丈夫だ」という気持ちを強く持っていて、後年、なぜそれほどまでに祖父を信頼したのだろうと考えてみたことがあります。

当時昼食後は祖父が昼寝をするから静かにするようにという規則があったのですが、遊んでいるうちに祖父の書斎に入ってしまったことがあるのです。祖父は机の前に端座して、目をつむっていました。直感的に「これは祈っているお顔だ」と感じた私は、すぐに書斎を飛び出しました。父と早くに別れたため、祖父が父の代わりであり、祖父がこの世で一番偉いと思っていた私は、祖父がさらに上なるものに対して敬虔な祈りをささげていることに強い感銘を受けました。カーライル^(※3)もまた、この世で一番偉いと感じていた母が敬虔な祈りをささげている場面に何度か遭遇し、母より上なるものが存在するということを自覚されたそうです。それが信仰心を深めるきっかけになったと語っています。

佐多：加藤さんご自身はクリスチャンでいらっしゃるのですか？

加藤：クェーカーの家に生まれ育ちましたので、思考は祖母の影響を受けていました。クェーカーでは洗礼をしないのですが、16歳のときに、なぜか自ら教会で洗礼を受けました。しかし教会にはほとんど行っていない。幼いときからの習慣ですから、嫁ぎ先でも食



「小日向会」定例会にて

新渡戸氏に直接つながりのある方々の手により発足し、現在では会員の枠を氏の研究者・敬慕者などにも拡げている。「小日向」とは新渡戸氏の自宅があった地域名からきている。
連絡先：国際文化会館 企画部（担当：柏） 〒106-0032 東京都港区六本木5-11-16
TEL: 03-3470-3211 FAX: 03-3470-3170

前にお祈りをしたのですが、義父に「なんだ、アーメン！ソーメンか！」と一喝されてしまいました。私はふざけているのかと思って笑ってしまったのですが、仏教徒の目には奇異なものに映ったのでしょうか。次第に教会に行くことも遠慮するようになりました。

佐多：日本人の反応はみなそのようなものかもしれませんが、宗教というのは自分を謙虚にさせます。それが大事だと思うのですが、日本では個人の信仰に関して混乱があって、経済的に成功したときにそれ以上の段階に進めなかった大きな原因がここにあると思うのです。精神的なものを日本人も持っていると思うのですが、ちゃかしてしまうところがある。ブッシュ大統領やクリントン元大統領でも、人間である限り間違いは起こすけれども、敬虔なクリスチャンとしての顔があって、人間としてこうありたいという共通の認識というか、理想を持っているわけです。日本人は、現世御利益があればそれでいいとばかりに、一生をかけて持つ個人としての理想や信仰心が希薄な気がします。パリのノートルダム寺院でコインを投げて拍手を打ち、仲間に注意されたという弊社員がいたらしいのですが、意外とこういう日本人は多いのではないのでしょうか。

加藤：日本には精神的なものを受け入れにくい土壌があるのでしょうね。

佐多：それからやはり日本はルネッサンスを経験していないので、個人の解放がなされていないということもあるでしょうね。個人が自立していないから、いつまでたっても「共同体」の論理に甘んじてしまう。個人としての宗教が根づかないのもそのせいではないでしょうか。だから新渡戸先生のような方は私には理想なのです。5千円札の人物だという程度の認識だけではなく、新渡戸稲造という立派な目標とすべき人物がいたことを、日本人にはもっともっと知って欲しいと思います。

加藤：祖父については、活動してきたことばかりが書かれていて、内面について触れているものはほとんどありません。祖父は常に祈りに支えられている人でした。生徒一人を教えるときでも、「今日教える子供たちに少しでも知識を分かちつことが出来ますように」と、祈りと謙虚な気持ちを持って教壇に立っていたそうです。

佐多：すばらしいエピソードですね。まさに新渡戸先生そのままという気がします。家庭では厳格な方であられたのですか？



鎌倉の別荘にて

（中央：新渡戸氏の膝に抱かれているのが加藤氏）

加藤：父や兄には厳しかったようです。祖母メリーは第一子を難産で亡くし、子供を産めない体になりました。父は養子として迎えられましたが、日本とアメリカの架け橋になれるようにと期待されて、6歳から大学卒業までをアメリカで過ごしました。帰国してからはジャーナリストとして活躍しましたが、どうしてか放蕩息子になって、祖父から勘当されてしまったということがありました。私は父のよい面も見てきたので悪いことばかりは言えないのですが、祖父にしたらさぞかし期待を裏切られたという気持ちが強かったことでしょう。

それにしても、私にはとても優しい祖父でした。風邪をひいても、病院まで手をひいて連れていってくれるのはいつも母ではなく祖父でしたし、寝ているときに布団をかけ直してくれるのも祖父でした。

こんなこともありました。祖父の家は当時としては和洋折衷の立派な建物だったのですが、内村鑑三先生が訪ねてこられて「こんな贅沢な家に住んでいて、新渡戸くんのために嘆く」とおっしゃられたことがあります。しかし、祖父はなにを言われてもにこにこしていました。後年、祖父の日記を調べていて分かったのですが、その家は祖母であるメリーのアメリカの実家と似たスタイル、同じ規模なのです。遠い異国の地にメリーを連れてきて、なおかつ初めの子を難産で死なせてしまったことの責任も感じていましたから、メリーのことを本当に大切にしていました。だからメリーが自分たちの生活にふさわしい住まいとして満足さえすれば、誰になんと言われようとも全く平気だったのです。

佐多：祈りを知っておられる方の優しさや強さの表われですね。私はもっと新渡戸先生のことを知りたいと思い、現在「小日向会」の会員として、毎年先生のご命日の10月16日に開かれる定例会に出席させていただいております。1933年にカナダのビクトリアで先生が亡くなられてから、今年で68周年になられるのですね。「小日向会」のように、先生の残された精神を引き継いでいくような活動はとても意義があると思います。

加藤：もっと多くの方に祖父のことを知っていただけるよう、私も活動を続けていきたいと思います。

（※1）Vitalite 20参照。

（※2）キリスト教プロテスタントの一派。アメリカ人の妻メリー夫人もクエーカー教徒。

（※3）イギリスの評論家・歴史家。